

心的表象とメタファー*

松 尾 貴 哲

1. はじめに

虹について述べよというならば、どのような説明ができるであろうか。たとえば、水滴で屈折した太陽の光によって作られる光学的自然現象、雨が降った後の空に現れる7色で彩られたアーチ型の模様、などという物理的説明に加え、晴れた空を祝福する7色の光、といった比喩的な説明も可能である。しかし、これらの説明の内容やその真偽性はどうか、虹について解釈そして説明ができるというのは、虹とはどのようなものであったかを自分の心の中に思い浮かべることができるからに他ならない。そして、虹というたった1つの現象ですら、我々は無限に解釈、説明することができる。

人間は「心で活動」することができる能力を持って生まれるように進化している。あらゆる現象を心の中で思い浮かべることが可能であり、同時にその心をことばに乗せてコミュニケーションすることができる動物である。「あらゆる現象」というのは、耳や目など五感で捉えられる感覚的現象に加えて、他人の信念や思考などといった概念的事象も含まれる。たとえば、夏の夜空に花火が舞う様子や嗅覚を用いて今晚の食事は何かなどを頭の中で想定することができるし、美術館で鑑賞した数々の絵画作品について、ステージ上で演じたアーティストのパフォーマンスについて、他人にその内容や様子を伝えることができる。概念的事象を例にあげれば、涙を流し

て泣いている人を見れば「悲しい」という感情、バス待ちでそわそわしている人を見れば「彼は急いでいる」「彼は遅刻したくない」といった類がこれに相当する。また、この概念的対象は対象を問わない。たとえば、心を持たないアジサイやカタツムリに対して「雨が好きなのだ」「この二人は仲が良いのだ」と比喩的に解釈することによって、信念や欲求について考えることも可能である。

我々がこのように考えることができるのは、ある「生得的認知メカニズム」の恩恵をうけているからである。これは、発達心理学またはチンパンジーなど霊長類の認識発達の分野において盛んに研究が進められている「心の理論機構 (Theory of Mind Module)」と呼ばれる認知モジュールに相当する。心の理論機構とは、人間が信念や欲求を持った存在であり、それに基づいて人間は行動することを可能にする生得的認知システムの総体である。我々は、自分だけでなく他人にも精神や心があると考え、それによって相手が何を考えているのか察知することが可能となる。そして、他人がある行動を起こしたことを理解したり、他人の言っていることに対して適切に反応したりすることができるのである。

その心の理論機構を具体的に説明する概念として「表象 (representation)¹⁾」がある。表象とは、外界に対して自分や他人が心の中に抱くイメージのことで、大きく3つに分けて考えることができる。

(1) a. 外的表象 (external representation)

Mary: John ate an apple.

b. 心的表象 (mental representation)

Mary: (I think) John ate an apple.

c. メタ表象 (metarepresentation)

Mary: (I think) Tom believes that John ate an apple.

(1a) の外的表象は、実際の現象と物理的に一致している、つまり真である関係を保持しているものである。たとえば、John が実際にりんごを食べた

という状況を知覚した場合、または Mary が「John がりんごを食べた」と極めて明示的に伝えた場合などに心の中で構築される表象群であり、人の信念や思考が介入しないものである。一方 (1b) の心的表象は、心理的な関係に依存している場合の表象であり、実際に起こった物理的現象について真偽が問えない表象を指す。実際に食べたかどうかはわからないが、Mary が推測として「John がりんごを食べたであろう」と伝えた場合、あるいは John が実際にりんごを「食べた」のではなく、「食べたい」と思っているコンテキストがあった場合に構築されるものである。簡略的に言えば、「Mary は～だと思う」「John は～したがっている」と、他人が心に抱く信念や欲求の存在について理解することはすべて心的表象である。(1c) のメタ表象は、第三者に帰属される上位の心的表象のことである。たとえば、「Tom は何て言っていた？」という質問の返答として、Mary が「John が（りんごを）食べたらしいって」と伝えたとしよう。聞き手は、Mary 自身が持っている「Tom の言ったことは～だと思う」という思考に加え、Tom が心に抱いている「りんごを食べたという行為自体は John であるようだ」というさらなる思考の存在を理解しなければならない。すなわちここでは“John ate an apple”は Mary ではなく Tom の信念として理解され、その信念が Tom に帰属されることによって解釈が可能となる。この帰属された心的表象がメタ表象に相当し、また、このように信念や思考を他人に帰属することができる能力のことを「メタ表象能力 (metarepresentational ability)」と呼ぶ。

本論で紹介する関連性理論は、発話の解釈を認知システムに立脚して考えており、上記の心の理論機構を言語モジュールとは独立した1つの認知モジュールとして位置付けている。発話というのは言語形式と話し手の信念や思考に体系的隔たりが存在するものであり、言うなれば、ことばによる伝達という行為は多種多様な「推測」に依存している。その推測を可能にしているのは、他人の心を読む (mind-reading) 能力であるという事実である。そして、その事実を詳細に説明できる理論を構築することへの道を招いたのは、関連性理論の1つの功績であると言えよう。

次の例を見てみる。

(2) John is a computer.

(3) (演技が下手な人に対して) She is Audrey Hepburn.

日常のコミュニケーションにおいて (2) や (3) のような、いわゆる文彩的発話 (figurative speech) は頻繁に交わされるものである。(2) はメタファー、(3) はアイロニーの効果が備わっている発話である。これらは、いずれも字義通りの解釈で伝達が成功すると話し手が考えているとはいいがたく、一方で聞き手は、字義通りの意味が、話し手が伝達したい内容であるとは見なすことはありそうもない。ここでは、話し手が言質を与えているのは発話の命題に「類似」している思考であると理解する。言い換えれば、命題の表示する思考が真であるととらえて解釈するのではないということである。聞き手は (2) の “computer” から「冷たい性格である」または「正確に仕事をこなす」といった話し手の信念を含意として伝えていることを理解し、また (3) は「彼女はオードリー・ヘップバーンだ」という信念や思考が話し手自身のものではなく不特定の第三者に帰属したものであること、さらにその信念や思考に「(オードリー・ヘップバーンなんて思う人がいたら) 馬鹿げている」という嘲笑的態度を付加させることによって自分の意見とは切り離して伝えていると理解するのである (座間 2003)。すなわち、メタファーの解釈は語彙を解読する言語的知識に加えて心的表象の理解が必要であり、アイロニーはその心的表象を他人に帰属することのできるメタ表象能力が必要である。

上記のような発話の例に限らず、言語が文学的に使用されることはめったにない。なぜなら、言語というものは想像できる限りの膨大な数の不独世界を反映したものであり、その世界についての信念を表示することを可能にしている。そして、その世界に対して自分とは異なる考えを他人はそれぞれ持っている。我々はその世界を「表象」として心の中に構築し、言語生活において我々はその表象をお互いに共有し合うのである。すなわち、言語による伝達という行為は、どんな場合でも言語形式を解読さえすれば

成立するわけではない。解説の結果で得られた表示をさらに広げることで話し手の信念や思考を読み取り、適切な反応が可能になるよう聞き手は努めなければならない。大きな視点で見れば、発話を解釈するには他人の信念や思考について考える心的表象の理解があって初めて可能になるのである。

本論では、発話の言語表示と話し手の思考の類似性問題が顕著である (2) のようなメタファー発話について考察するものである。次章では関連性理論の枠組みを紹介する。関連性理論の柱である情報意図と伝達意図の原理に基づき、言語の解釈的用法について述べるとともに、メタファー発話の解釈がどのようなメカニズムを形成しているのかを説明する。続く第 3 章では、表出命題の復元作業の 1 つである「アドホック概念構築作業 (ad hoc concept construction)」に注目し、その中で、心の理論が説明する心的表象の概念がメタファー発話の解釈メカニズムを説明するのにどのように貢献しているかを考察する。

2. メタファーと関連性

この章では、本論のよりどころとする関連性理論の紹介を行う。また、メタファー発話の解釈メカニズムを捉えるのに、関連性理論がどのような概念、方法を提示しているのかについて触れる。

2-1 関連性理論

Sperber & Wilson が 1986 年に提唱した認知語用論の理論である関連性理論の最大の特徴は、発話の解釈が 2 つのモジュールの相互作用によって行われるというものである。人間の持つ普遍的傾向である認知の側面と、統語論や意味論的演算を行う言語解説の側面とを明確に区別化し、人間のあらゆる行動を駆り立てる基盤となる認知機能の重要性を主張した。関連性理論によると、我々の認知は「最大の関連性を目指す」という傾向を持ち、

発話解釈は関連性の諸原理に保たれて行われる、というものである。

野球中継にチャンネルをあわせた直後にベースを一周している打者が映っていたとして、我々が心に思い浮かべることといえば「ホームランらしい」「この打者はよく打つな」などであり、決して球場の外見の様子などについてまっ先に呼び出されることは少ない。我々がある事象を知覚した際には、必ずそのコンテキスト内で、また自分に対して何らかの関連のある情報を期待する傾向がある。言い換えれば、人間は自分の持つ「認知環境」に何らかの「改善」をもたらしてくれる情報を常に、また無条件に追いつめている傾向がある。関連性理論ではこの傾向を普遍的な人間の認知原理として捉え、「関連性の第1原理」を規定している。

- (4) 関連性の第1原理 = 認知的関連性の原理 (first or Cognitive Principle of Relevance) :

人間の認知は、関連性を最大にするように働く傾向を持つ。

(Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.)

(Sperber & Wilson 1995, 262)

関連性を有する情報としては3種類あり、(i) 既存の想定と結びつき文脈的含意をもたらす情報、(ii) 既存の想定を強化する情報、(iii) 既存の想定を破棄する情報、である。たとえば「阪神が優勝した」という情報は、「阪神が優勝すれば経済効果がある」と期待している人にとっては「経済効果がある」という文脈的含意を生み出す。単に「阪神が優勝するだろう」と予測していた人にとっては(ii)の定義に、阪神が負けそうな試合経過を見て「今日の優勝はない」と考えていた人には(iii)の定義に当てはまることによって、いずれも「阪神が優勝した」は関連性のある情報となる。また、関連性というのは認知効果(cognitive effect)と処理労力(processing effort)の兼ね合いによって定義される相対的概念である。たとえば「阪神が優勝し、道頓堀は静寂に包まれた」という情報も「経済効果がある」と期待する人にとっては(i)のように関連のある情報ではあるが、後半の「道頓堀は静寂に

包まれた」という無駄な情報が幾分の処理労力を引き起こすことになるので、認知効果が相殺され関連性はより低くなる。すなわち、認知効果が多いほど、またそれを生み出すために犠牲となる処理労力が少ないほど、関連性は高まるのである。

このように、関連性理論の基本的想定は「人間は、最小の労力で最大の認知効果を得ることを目指す」ことであるが、あらゆる発話の解釈もこの基本的認知原理に立脚していると考えている。ことばによるコミュニケーションにおいては、話し手は何らかの情報を持っているという「情報意図 (informative intention)」を聞き手に明示的に理解させ、それを聞き手に知らせたいという「伝達意図 (communicative intention)」を持っているということが前提としてある。我々は 1 つの思考を伝達しようとして、言語形式を選択する。話し手はその思考が相手にとって情報性があると信じ、聞き手にその情報性を得るための幾分の労力を課することを要求する。一方で聞き手が労力を犠牲するのは、それによって何らかの認知環境の改善につながる情報を獲得することができると期待するからである。すなわち、話し手は相手の注目を要求し、その代わり報酬として適切な関連性を有する情報を手に入れられることを聞き手に保証しているというのが、関連性理論の主張する言語によるコミュニケーションの定義である。一般的に我々が行う、ことばによる伝達という行為には、必ず情報意図と伝達意図が備わっているのである。

情報意図と伝達意図に基づいて行う伝達を「意図明示的伝達 (ostensive communication)」と関連性理論は呼んでいるが、そうならば、あらゆる発話行為はそれ自体、意図明示的伝達行為である。発話行為を律している規範として、関連性理論は次のように規定する。

(5) 関連性の第 2 原理 = 伝達的関連性の原理 (Second or Communicative Principle of Relevance) :

全ての明示的伝達行為は、それ自体が最適な関連性を持つことを見込んでいる (Every act of ostensive communication communicates a

presumption of its own optimal relevance)

(Sperber & Wilson 1995, 271)

つまり発話をするという行為は、その情報が相手にとって関連性がある、すなわち認知上の報酬があるということを聞き手に促しているということであり、さらにその行為は「最適の関連性 (optimal relevance)」を持っているのだという信念を聞き手に伝えていることになる。ここで述べた「最適の関連性」とは2つの側面から規定され、関連性理論では次のような定義をしている。

(6) 最適関連性の見込み (Presumption of Optimal Relevance) :

- a 意図明示的刺激は、聞き手がそれを処理するための労力に値する程度の関連性を有する。(The ostensive stimulus is relevant enough for it to be worth the addressee's effort to process it.)

(Sperber & Wilson 1995, 270)

- b 意図明示的刺激は、話し手の能力と興味に合致する範囲内で、最も高い関連性を有する。(The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences.)

(Sperber & Wilson 1995, 270)

すなわち、「聞き手は発話を処理する際、少ない労力でもって聞き手の注意に値する十分な認知効果を得ようとする」のであり、「話し手側で可能な限り努力したと仮定すれば、同じ認知効果をより経済的なやり方で達成できるような他の発話は存在しない」のである。

このように最適関連性の見込みを伝達することがあらゆる意図明示的発話解釈を律している規範があるならば、話し手、聞き手双方がその責任を負うことになる。話し手は聞き手の復元しやすいように形式を選択し、さらに満足のいくレベルの効果が達成されると期待したものを、聞き手が不

当な労力なしに獲得した最初の解釈が正しい解釈，すなわち話し手の意図した解釈であると考ええる。発話というのは，その情報が相手にとって関連性がある，つまり認知上の報酬があることを伝え，相手にその心的労力を要求するものであり，聞き手は認知効果という報酬の期待があるからこそ発話解釈に従事するのである（武内 2003）。この原理こそ，関連性理論の中核を占めるものである。

2-2 表意と推意

発話解釈を認知システムに立脚して説明することは 2 つの認知過程を区別することであるが，これは「解読 (decoding)」と「推論 (inference)」という区別である。前者は言語記号の論理的算定を指し，一連の音声表示を統語的，意味的演算によって命題へと準じる概念的表示である論理形式へと展開するものである。一方後者の語用論的推論過程は，発話によって話し手の伝えようと意図した意味の復元であるが，関連性理論ではこの過程をさらに 2 つに区分する。

1 つめは，形式の意味表示に聞き手がその場での文脈情報を駆使し肉付けして得られる想定を指し，これを「表意 (explicature)」と呼んでいる。形式の上にその文脈において論理的真偽性が与えられる状態まで展開されたものを表出命題 (proposition expressed) と呼ぶが，これがそのままの形を保持して伝達されたとき，表意となる。

(7) Mary: Robert is a bulldozer.

(8) Mary thinks that Robert is so insensitive to other people's feelings.

(9) Mary doesn't want to talk to Robert.

(7) のメタファー発話は，聞き手が bulldozer が何を指しているのか，bulldozer が何との関係を意味しているのか，Mary が Robert をどのように考えているのかなどを復元しなければならない。たとえば，bulldozer の持

つ意味と文脈的背景から聞き手は (8) のような命題内容を復元するかもしれない。いずれにせよ、与えられた形式の持つ意味からこれこれと復元していった結果、事象の真偽を問える意味内容すなわち表出命題に達する³⁾。また、発話のコンテキスト次第では (9) のような内容を含意している (What is implicated) と考えられる。関連性理論では (8) を表意と呼び、(9) のような内容を「推意 (implicature)」と呼ぶ。表意は実際の発話に乗せられた言語的意味の上に統語的、意味論的演算と推論を働かせて得られるもので、推意は発話によって伝達される論理形式に依存しない推論のみによって得られる他のあらゆる意味である。そして (9) のような推意は、聞き手が発話の表出命題を導出した場合にのみ得ることができると考えられる (Carston 2002, 武内 2002)。

ここまで考察を進めると、発話解釈は 3 つの段落に分けることができることが示される。(7) の言語形式の持つ意味、つまり意味論的意味、次に (7) を発展させて得られる (8) のような発話の明示的意味 (表意)、そして語用論的推論能力にのみ依存する (9) のような発話の非明示的意味 (推意) である。これら 3 つのレベルはオンライン (on-line) で働き、特定の推意の導出を保証するために、(8) のような明示的内容が適切に拡充されていなければならない (武内 2002)。

2-3 言語の解釈的用法

関連性理論では、発話というのは話し手の信念や思考あるいは誰かの信念や思考を様々な「類似性」をもって「解釈的」に表示したものと考えている。ことばによるコミュニケーションにおいて発話が常に厳密な字義性を保持する必要はなく、必ずしも字義通りの真性を話し手と聞き手は期待していると見込まれているのではない。たとえば、ある言語に適切な訳をあてて他の言語で表示する「翻訳」、全体の内容を簡潔にまとめあげる「要約」も、1 つの発話が別の発話を表示するために使用されるものである。また、その表示対象は常に現実的状况や話し手の考えとは限らず、他人の言

ったことを報告する「話法 (reported speech)」や、他人の抱いた信念や思考に対してある態度を表明する「エコー発話 (echoic)」など、聞き手を含む他人の発話あるいは他人の信念や思考もなりえる。すなわち、思考と表示が内容的、論理的面で類似していれば十分に伝達として機能しうることもあり、ことばによるコミュニケーションにおいてはごく一般的な現象でもある。しかし、他人の信念や思考に表示を与える際、自分の考えを多かれ少なかれ解釈的に表示すると考えるのは当然であるが、さらに自分の思考を表示する時でさえ、言語形式に乗せたものが正確な記述とはいいがたい。正確に話し手の思考を言い切るのは「正確」ではないのであり、大きな視点で見ると、発話というのは全て思考の解釈的表示⁴⁾と考えてよい (Sperber & Wilson 1986/95, 232)。つまり、発話を考慮する際に重要とされる点は、思考を正確に表示する発話の「真実性」ではなく、話し手の信念や思考とその表示との間の「類似性」なのである。

すなわち、1つの発話が1つの思考の解釈的表示、言うなれば、発話が「解釈的類似性」に依存しているのであるならば、意味的および論理的特性において発話と思考との類似がどの程度なのかを聞き手が判断する基準は何か、ということが問題となる。

(10) の例を見てみよう。

(10) a. 私はレコードを 3000 枚保有している。

b. 私はレコードを 3421 枚保有している。

関連性理論は事象を正確に表示しない発話のことを「言語の緩い使用 (loose use)」と呼び、(10a) はこの緩い使用に相当する。(10b) が真であった場合、厳密に言えば (10a) は偽の発話になるが、話し手のレコード保持数が大まかに問われているといった状況では適切であり、(10b) のような厳密で正しい答えの方が不適切であると直感的にわかる。いずれにせよ、偽の返答である (10a) から聞き手が推論するであろう想定は、たとえば (11) のようなものであるかもしれない。

- (11) a. 話し手は音楽に興味がある。
 b. 話し手はレコードの保持数を自慢している。
 c. 話し手は給料のほとんどをレコードに費やしている。

ここで注意すべき点は、(10a) (10b) どちらの答えからも、話し手の趣味、性格、金銭感覚など、話し手のレコード保持数を指標として使おうとしている (11) の文脈含意、あるいはそれ以外についても同じような文脈含意を導き出すことができるということである。それならば (11) のような含意を伝達するのに (10a) は (10b) と比較してきわめて経済的であることになるが、発話の信頼性自体が失われることはないであろう。たとえば「5 時です」という発話が発された時点で実際には 4 時 59 分であっても、その話し手が嘘を言っていると責める必要は全くないのである。

(10a) (10b) の発話の含意が (11) ならば、これらの含意を伝達するにはどちらの発話を用いても構わないことになるが、関連性の原則に制約を受けている聞き手は、発話に正当化されない労力を要求しているのではないという想定の下で発話の解釈にあたるものである。言語の緩い使用による発話において話し手が伝えたいのは、発話の字義明示的意味それ自体ではなくその発話の含意であり、それを提示された聞き手は伝えようと意図された特定の含意を推意として復元するよう仕向けられている、ということである。そしてその文脈含意が推意として伝達されたと理解される限りにおいて、その発話が関連性の原理と調和していると聞き手が仮定する根拠があるわけである。言い換えると、話し手は厳密に字義的で事象に即している (10b) よりも、事象と比べて偽ではあるが経済的な (10a) を選び、伝えたいと意図したことが推意として伝達されると考えることで、当該発話の関連性を保つことができると信じているのである。

メタファー発話は非字義意味という特性、また特定の文脈含意を伝達して成功に納めることができるという特性を保有しているゆえに、発話としては常にこの言語の緩い使用に相当すると考えてよい。メタファー発話の

場合は通常の緩い使用よりもずっと緩い類似を伴っている場合であるが、メタファーはきわめて創造的、空想的なものから一般化なものまで様々である。たとえば「私のパソコンが新しいメモリを認識しない」と言うように、我々にとって説明しにくい事象を伝える際にはこのような比喩的な説明に頼りがちである。この伝達背景には、不当な労力を背負うことなく、伝えたいことであるその発話の含意をより経済的に、より効果的に聞き手が復元してくれると話し手が信じているのである。

また、関連性理論では、解釈的類似性というのは程度問題であると見なしており、導出される文脈含意の程度に依存していると考えている。ある発話がある信念や思考と解釈的に類似している程度は、当該の発話が持つ字義的概念と話し手が意図した仮定概念との共通点の程度に加え、さらには両者の論理的含意の共通の度合による。たとえば、緩い使用として表示された (10a) が、(10b) と比較しても同等の文脈含意である (11) を導き出すことができるという事実は、(10a) が事象を正確に表示している (10b) と同レベルの高い類似性を保持しているということに帰結するのであり、この意味で (10a) はきわめて事象に忠実な緩い使用として考えてよいことになる。すなわち、同じ文脈含意を生めば生むほど話し手の思考と発話は類似しているのである。

発話がメタファーである場合には、この類似性の程度がより顕著に表れる。次の例で比較考察してみよう。

(12) Jane (talking to her friend): John is a bachelor.

(13) Bachelor is unmarried man.

(14) Jane (talking to her husband): John is a bachelor.

(15) Bachelor is a flirt.

コンテキストから考えると、(12) は一般的概念としての bachelor と Jane が考えている思考との類似性が非常に高く、概念的なズレが生じていない。したがって (12) は、ほぼ字義通りの意味である (13) のような「結婚してい

ない男性である」「独身である」などで関連性が達成されると解釈してよいものである。一方 (14) のメタファー発話では, bachelor の文脈含意が広く導き出され, (15) の「浮気症だ」や, コンテキスト次第では「毎晩帰りが遅い」「自分の子供や家族のことを考えない」などという一時的な情報が復元されることになる。すなわち, 発話がメタファーである場合には “bachelor” の字義的概念と話し手の思考がずれ, 両者はかなり低い程度の類似性を有することになるのである。

すなわち, メタファー発話というのは, 聞き手が (15) のような広範囲にわたる「弱い推意 (weak implicature)」から, ある特定の想定を話し手の意図として同定することによって関連性が達成される発話である。しかし, 弱い推意を広く呼び出すという認知行為は, 話し手の意図同定のために用いられる処理労力が聞き手により多く課せられていることを意味する。なぜなら「John は独身である」よりも「John は浮気者である」と明示的に伝達した方が, 聞き手に不当な労力を与えることなく, より経済的に関連性を達成することができるからである。しかしながら, メタファー発話の場合には話し手の特定の意図をより際立たせ, より効果的に伝達したいという話し手の企てが含まれているに違いない。言うなれば, メタファー発話というのは, 話し手の意図を検索するために犠牲となる処理労力が, 広範囲にわたる弱い推意がもたらす認知効果によって報われることで関連性が達成されている発話なのである。すなわち, メタファーとして発話をその人の最良の伝達手段として正当化させるのは, こういった弱い推意群なのである。このように, 弱い推意群が呼び出されて関連性が達成されている発話の効果は「詩的效果 (poetic effect)」と称されてもよいと関連性理論は主張している (Sperber & Wilson 1985/96, 168) が, 言い換えれば, 詩的なものも含めたあらゆるメタファー発話というのは, 一連の弱い推意がもたらす高い詩的效果という報酬をもって聞き手の心的労力を相殺できることを意味するものである。

Gibbs & Gerrig (1989) がメタファーを特別にしているものは, 理解の産物の中にあるのであってメタファー的意味が理解される過程の中にあるの

ではないと言っているように、メタファーは日常で用いられる言語の緩い使用の一種であり、質的に異なるものではない。また、字義通りの発話とメタファー発話とは解釈的類似性の程度問題に求められ、ずっと解釈的な類似性に依存しているに過ぎない。そして文脈含意を話し手と聞き手が共有できる度合いが少なければ、より詩的效果を有する発話になるということである。

3. メタファー発話の解釈メカニズム

メタファーは言語の緩い使用であり、その発話の解釈的類似性という概念に求められることを 2-3 で述べた。類似性という概念を使ってメタファー発話がどう解釈されるのかを説明するカギは、表出命題の復元作業の 1 つである「アドホック概念構築作業 (ad hoc concept construction)」にある。アドホック概念は語の百科事典的知識のみで構築されるものではなく、その事象ないしは一般的概念に自分の信念や思考を反映させた一時的概念として構築していることもある。特にメタファー発話においてはその傾向がきわめて顕著であり、語の中心的素性を破棄して新たな解釈を加え、低い類似性をもって伝達を試みるのが特徴的である。そしてそのメタファー発話の解釈には、喩えられる語の中心的素性の共有に加えて、話し手の信念や思考を読み取る心的表象の理解と強い相関性があると本論では考える。本章ではアドホック概念構築作業を再考察し、心的表象との相関性に関して新たな定義付けを行うことで、メタファー発話の解釈メカニズムを明らかにしていく。

3-1-1 アドホック概念構築

発話解釈はコンテキストに置かれた際の意味の復元であるが、発話の解釈的類似性は単語の意味にもっとも顕著であると言える。1 つの語がその

コンテキストで伝える概念は、記号化された概念を広げたり、緩めたり、弱めたり、強めたり、あるいはその両方によってその場限りの意味内容が決まってくるのが事実である。当該の発話限りの語の意味を構築しなければどんな発話解釈も成立せず、この語彙的調整作業 (lexical adjustment) を経て発話の表意が復元されるのである。本論で考察するメタファーは、このアドホック概念構築を使用して説明されるが、まずはこの作業について詳述する必要がある。

次の例を見てみる。

(14) a. France is hexagonal.

b. I'm so tired

(15) a. France is hexagonal^{*}.

b. I'm so tired^{*}.

(14a) は、フランスが左右対称の正確な六角形であるという解釈はありえず、フランスの国土が六角形のような形をしていることを話し手は伝達している。すなわち、ここでは六角形概念が一時的に緩められることで当該の発話の意味が復元されることとなる。(14b) は、tired によって伝達される「疲れ」の質と程度はコンテキストに応じて異なるもので、たとえば (14b) の発話が子供に「遊んで欲しい」と言われたことに対する返答であった場合に初めて「遊びたくない程に疲れている」と、疲れの範囲が狭められるのである。

一般的にメタファー発話というのは、話し手の信念や思考を喩えられる対象である 1 つの単語に類似させて表示する例が多く、それと言語形式との関係を復元するには、慣習的メタファーの論理形式である “A is X” に展開されることになる。次の例を見てみよう。

(16) John's room is prison^{*}.

字義性の欠如、すなわちメタファーとして正当化される場合、表示された語の百科事典的項目内にある中心的素性はすべて却下される。(16) ではアドホック概念が *prison* に構築され、一連の含意による文脈効果の範囲を探し出すことで関連性を有し、詩的效果を得たメタファーとして解釈される。これらの概念は当該のコンテキストにおいてのみ受け入れられるものであり、*prison* という語に関して新しい一時的概念を付加していくことで、それが結果として表意を形成するに至るのである。たとえば (17) のような、語に類似性を持たせた一時的想定を聞き手は呼び起こすかもしれない。

(17) a. Prison is nude. (A is X)

b. Prison is damp. (A is X)

(18) Speaker thinks John's room is nude and damp.

(19) Speaker doesn't want to go to John's room.

(16) がある特定のコンテキストで伝達されたとき、呼び出された想定群が (17) であるならば、当該の発話で得られる表意は (18) であろう。さらに話し手の意図した特定の推意として (19) が呼び出されるかもしれない。すなわちメタファー発話の場合は、発話の言語形式にアドホック概念が構築されて初めて表出命題を復元することができるのである。また、(16) と (18) を比較しても明らかなように、当該の発話の言語形式とその表出命題および表意は体系的、そして解釈的にかなりのズレが生じることになる。

このようにして単語の意味を決定していくと考えるならば、上記の例のみならず「あいつは若い」「これは赤い」などのスケーラー (scalar) 的意味は素性が記述できず、ほとんどの語は定義不可能とも考えられる。しかしながら、単語の独立した定義がほぼ不可能であるにもかかわらず、我々はこのような語をごく日常的に用い、ごく普通に伝達は達成されているものである。そしてその意味を個々の伝達場でアドホックに決定し、言語による伝達を成功へと導いているという事実は正に驚異に値するものである。語というのは、これまでの想定に反して概念を記号化していると言えない

かもしれないが、完全な意味上の「価値」を記号化していないとは言い切れるであろう。したがって、語用論的に概念を構築していくことが義務的に求められるのである。

3 - 1 - 2 Metaphor within Metaphor

通常の発話においてもアドホック概念が構築される例は多いが、メタファー発話はすべてにおいてアドホック概念が構築されて解釈されると言っても過言ではない。そして、その呼び出されたあらゆる弱い推意群は、我々の持つ共通概念である百科事典的知識に依存している。しかし、呼び出された想定それ自体が、さらなるメタファー (Metaphor within Metaphor) である場合がある。

第2章であげた例をもう一度見てみよう。

(7) Robert is a bulldozer.

(20) Robert is a bulldozer.*

(21) a. ? Bulldozer is so insensitive to other people's feelings. (A is X)

b. ? Bulldozer is egocentric. (A is X)

ブルドーザーが人間の心的状態を持っているとは考えられないのであるから、(21) の想定はいずれもメタファーとして認識できるであろう。この現象はアドホック概念構築の既存の説明が不十分であることを伝えるとともに、導出される弱い推意群に関してさらなる考察が必要であることを物語る。言い換えれば、話し手の信念や思考と類似している語に帰属される特性はどこから来るのかを説明しなければならないということである。ただこの段階で言えることは、ブルドーザーの定義から導き出される百科事典的意味の調整という操作はメタファー解釈の第一段階ではあるが、それはむしろ弱い推意を呼び出すための「引き金 (trigger)」のようなものとして位置付けた方が妥当であるということである。たとえば、「ロバートはブルド

ーザーのように地面を均して道路を整然する」と言うように、もしメタファーがその事象に対し百科事典的意味のみの構築であるならば、発話の情報性が失われ、最大の認知効果を得なければならないという関連性を維持できないことになるからである。

(22) Juliet is the sun.*

(23) Margaret is iron.*

これらのメタファーも同じく問題を抱える例である。(22) は「太陽は太陽系の中心に位置し、生命を維持する太陽光線を放つ」という物理的「中心性」から、「Juliet は自分にとって欠かせない」や「存在が光り輝いている」という心理的「中心性」という変換が行われている。同じく (23) も感覚的から心情的「冷たさ」の解釈的変換が行われており、これらはいずれも百科事典的知識の調整のみで解決できるメタファー発話ではないと考えられる。

語彙的に解説された bulldozer の論理的入力、たとえばある種の重量のある機械またはそれに即した何かであり、それに基づいた一般的な百科事典的意味は、土地を均すとか、岩や破片を取り除くなどの視覚的イメージによる物理的な情報を与えるものである。しかし、これらの例は「ブルドーザーが他人の気持ちに対して無神経である」などや、「太陽は自分を優しく包んでくれる」などの心理的特性を所有するものであり、さらなる概念構築作業が必要になることを示唆している。

3-1-3 派生によるアドホック概念構築

そこで本論では、(20) のようなメタファー発話の解釈を二段構えで考察すべきであるとの立場をとる。前述のように、表出命題を形成するのに用いられるアドホック概念構築作業とは、特定の語の意味を「広める (broadening)」 「狭める (narrowing)」 という二つの方向で調整を加えていく

作業であるが、本論ではこの特定化する作業を精密化し、「広める」という調整をさらに二つに区別する。一つは語の定義を作るとされている百科事典的項目内の中心的素性を「保持したまま」広げられる場合であり、一方は定義上の中心的素性を完全に「捨てて」概念を広げていく方向で構築する場合である。メタファー発話の解釈は、必ず後者に属するものであることを主張したい。

このことを次の例で例証する。

- (24) a. 刺身は生である。
 b. ステーキは生^{*}である。
 c. 彼の論文は生^{**}である。

(24a) は字義通りの解釈が命題として完全に真を与えられる、「生」の字義的特性において思考と表示の間はかなり高度の解釈的類似性を保ったものである。(24b) の「ステーキが生である」は、たとえばレストランで注文した「ステーキ」において、完全に生肉としての特性は所有していないと我々は直感的に感ずるものであるから、字義的解釈として関連性は有さない。ここでは一般的百科事典的意味の「生」から語彙的調整によって特定化され、「ステーキの焼け方が食べ具合に至っていない程度の生加減」と聞き手が復元し、最適の関連性を有するアドホック概念としての「生^{*}」が構築される。しかし、ステーキといった食物に「生」という特性は事実として実在するので、「食べ具合に至らない程度の生」という想定は生の中心的素性 [+食物性] を保持したまま「生」から広げられて特定化されていると考えられる。一方で (24c) はメタファー発話である。当該のコンテキストにおいて (24c) を字義通りに解釈することは関連性を有さないことになるので、「生」にアドホック概念が構築されて、無限の「生」が持つ想定のうち、何らかの特性を抽出することを聞き手に託す。この場合に (24b) とは異なり、中心的素性である [+食物性] を捨て、「生」の概念を広げていくことになるのである。例えば (24c) での「生」から導き出される想定は (25) の百科

事典的知識を足し、調整を加えていくことで、(26) のような一時的概念を構築するかもしれない。

- (25) 生は食物が調理されていない状態である。
 (26) 生は完璧ではなく中途半端である。(A is X)
 (27) 彼の論文は完璧でなく中途半端である。

(24c) のメタファーにおけるアドホック概念としての「生^{**}」は、(24b) のようにその語が持つ無限の想定から 1 つの特定化された想定へと狭められたものではない。中心的素性である [+ 食物性] が破棄され、「生」が持つ中心的概念に話し手の解釈が加えられて表示された「生^{**}」である。すなわち (24c) では何らかの想定を対象となる語、「生」から「派生させる (derive)」ことによって (27) の命題を復元し、関連性との調和を保つと考えられる。

- (14) Jane (talking of her husband): John is a bachelor.
 (28) John is a bachelor.^{**}

第 2 章で例に挙げた (14) も同様である。bachelor が [+ 独身] という素性を持っているのであるから、ここでは既婚者として実在する John と決定的な矛盾が生じることになる。しかし、ここで話し手が意図したことは独身男性のもつ基本的素性についてではなく、独身男性の「振る舞い」を聞き手に伝えたかったのである。たとえば「他の女性に目が無い」「毎晩帰りが遅い」などの想定を呼び起こされると考えられるが、これらは husband が呼び出す中心的素性が、bachelor との百科事典的項目内から呼び出される素性と矛盾を引き起こすことで呼び起こされ、関連性を有する特性となるのである。

このように、命題が真理条件的に偽であるメタファー発話の表出命題復元においては、アドホック概念が「派生 (derivation)」という形で構築されることによって命題の真性を確立し、それが表意となる。聞き手は当該の

コンテキストで、語の意味素性を調整することによって、一時的概念を派生していく作業を課せられるのである。このことを次のように規定する。

(29) 派生によるアドホック概念構築：

主語と述語の関係において真理条件的に偽であるという条件が満たされたとき、またその場合にのみ、焦点化される語に帰属される特性は常に「派生 (derivation)」という形でアドホック概念の構築に貢献することができる。

この定義が与えられると、命題が偽であるメタファー発話において構築されるアドホック概念は、すべて派生によって構築されたものと考えることができる。また、この定義によって通常の発話解釈とメタファー発話の解釈の境界線をより明確にすることができる 1 つの基準も規定することができるであろう。

メタファー発話の場合のアドホック概念構築は、語の持つ定義上の中心的素性を破棄し、字義的意味から自分の解釈を加え、派生させていく過程であることを議論してきた。さらに以下の例を使ってメタファー発話の表出命題、表意および推意をデモンストレートしてみよう。

(30) A：床のシミが取れないね。

B：（それは）掃除機だからな。

(31) (A が手にしているものは) 埃を取る電化製品の掃除機である。

(32) それではシミは取れないので、別の方法を考えるべきである。

(30) の B が発した「掃除機」からは (31) のような想定を導き、その結果として推意の (32) を導くに至ると考えられる。すなわち (30) をコンテキストとして処理すると、(31) の想定がそのまま表出命題および表意となり、そして (32) が推意結論として導出されるであろう。

(33) A: 彼女が部屋を片付けろってうるさいんだ。

B: (彼女は) 掃除機^{**}だからな。

(34) a. 掃除機は口うるさい。(A is X)

b. 掃除機は汚い部屋が嫌いである。(A is X)

(35) 彼女は口うるさく、汚い部屋が嫌いである。

(36) 部屋を片付けるべきである。

一方メタファー発話である (33) の「掃除機^{**}」は、百科事典的意味による調整が真理条件的に矛盾を生じさせることになるので、前述の(31)のような想定を呼び起こすことはできない。ここでは [+ 機械性] という語の定義上の中心的素性を捨て、一時的に広めることによって (34) のような想定を呼び出すかもしれない。既に述べたように、(33) における弱い推意としての (34) は、真理条件的に矛盾が生じたとき、またその場合にのみ、文脈含意として呼び出されるのである。

さらに派生によるアドホック概念構築によって生まれた (34) の弱い推意群は、前述のようにメタファーの論理形式 “A is X” に展開されたものであるから、(31) とは異なりこの段階では (34) は (33) の表出命題および表意とは見なせない。(34) は表出命題復元のプロセスの 1 つであると考えられ、当該発話の表出命題は (35) になるであろう。そしてそれが表意となって初めて (36) を新たな推意として導出することができるのである。すなわち、メタファー発話の解釈を二段構えで考察するという意味は、(34) が推意として伝達されるのではなく、それが表出命題の形成に貢献し、そこから新たに (36) のような推意結論を呼び出すという説明によるのである。

3-2 心的表象とメタファー

語の中心的素性を一切破棄することで構築されるアドホック概念は、実際に起こりうる事象を正確に表示したものではない。言うなれば、話し手の思考とその表示対象とは、心理的な低い類似性によって保たれている。

メタファー発話においては、話し手は字義通りの語の意味ではなく、その喩えられる対象となる語についての「心的イメージ (mental image)」を所有している。すなわち、話し手は喩えられている語の事象に関する 1 つの「心的表象」を所有し、それを聞き手に伝えているのである。本節でメタファー発話と心的表象の関係に明確な定義付けを行うことで、本論は結論へと導かれる。

3-2-1 志向的立場

我々は外界や事象を認知して自分の信念や思考、すなわち「表象」を持つようになるのだが、その信念は決して外界を正確に「物理的な立場」でもって反映しないこともある。たとえば、我々が他人の行動を説明する際には、その人が何を考えているか、何をしがっているかという信念や思考を推測するのは当然のことであるが、時には心を持たない機械や抽象概念に対しても、この機械が何を信じているか、その概念が何を求めているか、といったように信念や思考を持っていると見なすことがある。言い換えれば、我々はあらゆる事象を「物理的な立場」でもって説明することもできるし、「志向的 (intentional) な立場」でもって説明することもできるのである。

次の例を見てみよう。

- (37) a. 体が言うことを聞かない。
 b. 海が呼んでいる。
 c. 誘惑が邪魔をする。
 d. 時間が流れる。

志向的な立場というのは他人の信念や思考について説明する時に用いられるが、この立場は、時には一般物や抽象概念に対して最良の説明ツールとなりえるものである。(37) は、我々がごく一般的に物理的や概念的事象を

志向的な立場で認知し、伝達を成功に導いているかを示すものである。我々は (37) のいずれも字義通りの現象があると考えもしない。しかし、これらを完全に物理的な立場で説明しようとするならば、かなりの考察力と労力を必要とするに違いない。我々にとって世の事象すべてを物理的に説明するのは非常に困難な課題であり、ほとんどは不可能であるといっても過言ではない。我々の心に構成される表象は、メタファー的な信念や思考も含まれているのである。言うなれば、心に含蓄される表象というのは、あらゆる外界をメタファー的に解釈したものであり、真理条件に包まれた外界の事象と対照的に、きわめて抽象的な概念なのである。

これらの点を踏まえた上で、(20) の例に戻ろう。

(20) Robert is a bulldozer.^{**}

(21) a. ? Bulldozer is so insensitive to other people's feelings. (A is X)

b. ? Bulldozer is egocentric. (A is X)

(20) のメタファー発話において、派生によるアドホック概念構築がもたらした弱い推意群 (21) は、話し手が作り出した世界においてありうると考える想定群である。すなわち、話し手が Bulldozer を知覚的、身体経験的に感じ捉え、それらを物理的な立場で記述したのではなく、志向的な立場でもって解釈しているのである。そして、それは外界の真理条件とは切り離され、話し手の表象の中でのみ真性を与えられる想定群なのである。

3-2-2 アドホック概念と心的表象

心を持たない事象に対して志向的な立場で表示する (21) や (37) に限らず、他人が何を考えているか、何を信じているかについて考えることができるのは「心的表象」の理解があって初めて可能となる。志向的な立場による解釈はすべて心的表象である。すなわち、Robert is a bulldozer という当該の発話において、Bulldozer is so insensitive to other people's feelings という

う一時的な想定は、話し手の心的表象なのである。

次のメタファー発話を見てみよう。

(38) This room is a pigsty.^{**}

(39) a. Pigsty is filthy. (A is X)

b. Pigsty is untidy. (A is X)

派生によって構築されたアドホック概念は、必ずしも志向的な立場で解釈されたものではない。たとえば(38)では、話し手は志向的な立場で pigsty を解釈しておらず、したがって (21) のような想定とは異なり、(39) では豚小屋が何らかの信念や欲求を持っているとは考えられない。しかし、それでも (38) は主語と述語の関係において真理条件的に偽のメタファー発話である。John の持つ中心的素性である [+ 人間性] と豚の持つ [+ 動物性] が干渉を起こし、前節 (29) の定義によって当該発話のアドホック概念は派生によって構築されているという事実があるからである。本論では以下のように考える。豚小屋が「乱雑である」や「汚い」という概念は我々に定着しているのであるが、「乱雑さ」や「汚さ」というのは、我々が実際に豚小屋の様子を知覚的、身体的に経験し、自分の信念や思考として解釈することによって初めて導き出される想定群である。豚小屋の様子を経験したことのない人にとっては、これらの想定を導き出すのは不可能であろう。言うなれば、(39) の想定は豚小屋という語の中心的素性ではない。

さらに次の例を見てみる。

(40) She is my angel.^{**}

(41) Angel is kindness. (A is X)

(42) Suzanne is princess.^{**}

(43) Princess is dignified. (A is X)

ある人が親切であり、ある人が高貴な振る舞いをするといった「人間の感

情や性格」や「人間のしぐさ」に関する想定は、実際にそのような経験をせずとも、我々は安易に思い浮かべることができる。これらのメタファー発話における派生によって構築されたアドホック概念は、それ自体が人間の心的状態である。人間の心的状態を説明する際には、真理条件は全く介入しない。当該の発話においては、その人がどのくらい優しい、であるか、いかに高貴であるか、といった心的状態の程度を話し手は伝えたかったのである。したがって、呼び出された想定 (41) (43) は、同じく話し手の心的表象であると考えてよい。

(45) Juliet is the sun.^{**}

(46) Margaret is iron.^{**}

物理的な現象を心理的に現象に変換して解釈できるということは、我々が持つ認知メカニズムである心の理論機構の恩恵である。我々は自分が構築した世界においてのみあり得る現象を心的表象として心に抱き、それを他人と共有することであらゆる伝達を成功に収めている。(45) では太陽が持つ物理的「中心性」を精神的「中心性」に、(46) では鉄の体感的「冷たさ」を人間の性格的「冷血性」に変換している。いずれの例も、話し手は事象に関する外的表象を一時的な心的表象として変換して伝達することで、その語の中心的素性を破棄してくれることを強く聞き手に求めていると言える。

Bulldozer is so insensitive to other people's feelings という志向的な立場で解釈した思考、Pigsty is filthy and untidy という物理的な立場で解釈した思考、Princess is dignified という心的状態も、いずれの一時的想定も、メタファー発話においては話し手の一つの心的表象である。メタファー発話において、派生によって構築されたあらゆるアドホック概念は、すべて話し手の心的イメージつまり心的表象と考えられるのである。

これらの議論を踏まえ、次のように規定しよう。

(47) アドホック概念と心的表象：

派生によって構築されたアドホック概念は、1つの心的表象である。

メタファー発話というのは、字義通りの意味を伝えない。忠実な字義性をすべて却下することで、その語についての話し手の信念や思考を聞き手に提示しているのである。話し手はメタファー発話の言語表示の中に、そのたとえる対象物である Bulldozer について、Bulldozer is so insensitive to other people's feelings という 1つの信念すなわち心的表象を埋め込んでいる。すなわち、メタファーは発話の伝達のメカニズムは、話し手が1つの心的表象として表示していることを聞き手に暗に伝えているしくみになる。そして、聞き手は字義的意味から何らかの特性を派生させる作業を課せられ、話し手のその場限りの心的表象を読み取ることに従事するのである。

4. 結論

本論は以下の定義をもって結論とする。

(48) 心的表象とメタファー：

メタファー発話の解釈には、心的表象の理解を必要とする。

本論では関連性理論と心の理論の両枠組みを用い、メタファー発話の解釈メカニズムについて考察を進めてきた。メタファー発話を含め、あらゆる発話は必ずしも事物を忠実に反映しているものではなく、その表示と話し手の思考との「類似性」に求められることを述べた。我々は、与えられた発話が思考と解釈的に類似していると捉え、心の解読に従事することで、ことばによるコミュニケーションを成功へと導いている。メタファー発話の場合には、話し手は伝達したい思考を別の表示に置き換えている「解釈的類似性」という概念を常に保有し、それは「言語の緩い使用」という概念で、メタファー発話がきわめて一般的な認知メカニズムで解釈されうる

ことも述べた。また、聞き手はメタファー発話を字義通りとして解釈するのではなく、アドホック概念を「派生」させることによって一時的概念を復元して解釈することが義務付けられている。また、その一時的派生概念は、話し手がある事象を解釈的にとらえた1つの心的イメージ、つまり「心的表象」であり、話し手はその心的表象を聞き手に理解させるように暗に仕向けているということをメタファー発話の例によって示した。そして本論では、メタファー発話の解釈メカニズムにいくつかの定義を与えることによって、「メタファー発話は心的表象の理解を必要とする」ということを主張した。

Happe (1993) は自閉症患者を対象にメタファー発話とアイロニー表現の理解に関する実験を行っている。他人の信念や思考について考えることができない自閉症患者はメタファー発話が理解できず、信念や思考を他人や第三者に帰属することができない患者はアイロニー表現が理解できないということを統計的数値で立証している。これらの結果は、アイロニー表現の正しい解釈が「メタ表象能力」を必要とすることに加え、メタファー発話の解釈が「心的表象」の理解を必要とすることを伝えている。

発達心理学的見解によれば、心的表象の理解は約3歳になって表れ、メタ表象能力は約4歳を境に獲得されていくものと考えられている。本論における数々の主張は、子供を対象にした実験室的研究によって初めて正当化されうるであろう。しかしながら、メタファー発話の理解には、単語の百科事典的知識に強く依存しているというのが妥当な見解である。たとえば4歳で理解されるメタファーもあれば、13歳でも理解しえないものもある。このような事実は、メタファー発話はいつ理解が可能かという問いに対して、実験室的研究によって証明されることの困難性を物語る。

また、本論は心的表象とメタファー発話との関係において、「直喩(simile)」との比較考察を行っていない。直喩はメタファー発話と全く同等の弱い推意を導出できる表現技法ではあるが、思考をより際立たせて聞き手に伝えたいとする「詩的効果」の面でメタファー発話よりも弱いと考えられている (Carston 2002)。メタファー発話と直喩との解釈プロセスがどの

ように異なるのかについて説明することは、メタファー発話の解釈メカニズムをより独立して定義することができると期待される。今後の課題としたい。

*本論文は、2003年1月に神奈川大学に提出した学位（修士）論文の一部を負っている。また、加筆・修正を加えるにあたって、武内道子教授から有用なコメントを頂いた。

注

- 1) representation という語は、関連性理論では「表示」と訳され、心の理論が説明する「表象」とは異なる。表象は人間が心の中に抱きうるあらゆる抽象概念を指し、表示はその表象を言語体系化したものである。
- 2) 「～って」は1つの表示を帰属して表示する「メタ表示」であることをきわめて明示的に聞き手に伝達する指標として機能すると考えられており、日本語特有の言語表現である。
- 3) 表出命題の復元作業は、「一義化 (disambiguation)」, 「意味充足 (saturation)」, 「自由富化 (free enrichment)」, 「アドホック概念構築 (ad hoc concept construction)」の4つである。詳しくは武内 (2002) を参照。
- 4) Sperber & Wilson はこの解釈的表示の存在によってしか説明できない言語表現があることに注目し、一次的表示レベル、すなわち真理条件の判定が可能な命題レベルでの言語の使われ方である記述的用法と区別している (Sperber & Wilson 1986 / 95)。
- 5) 表記上、アドホック概念が構築される語には一時的という意味で「* (アステリスク)」を記述する。
- 6) 派生によって構築されたアドホック概念は「** (ダブルアステリスク)」と記述することとする。

参考文献

Astington, J. W. 1993. *The Child's Discovery of the Mind*. Cambridge, Massachusetts.

- Harvard University Press.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Blackwell, Oxford. (武内道子, 山崎英一訳『ひとは発話をどう理解するか』1994. ひつじ書房.)
- Carston, R. 1988. "Explicature and truth-theoretic semantics." In R. Kempson (ed.) *Mental representations: The interface between language and reality*. Cambridge: Cambridge University Press, 155-81. Reprinted in A. Kasher (ed), *Pragmatics: Critical concepts*. London: Routledge. 436-64.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterance: The Pragmatic of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Gibbs, R. 1994. *The Poetics of Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gibbs, R. and R. J, Gerrig. 1989. "How context makes metaphor comprehension seem "special."" *Metaphor and Symbolic Activity* 4, 145-58
- Happe, F.G.E. 1993. "Communicative Competence and Theory of Mind in Autism: A test of Relevance Theory" *Cognition* 48. 101-19.
- 芳賀純・子安増生編. 1990. 『メタファーの心理学』誠信書房.
- Lakoff, G. and M, Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: university of Chicago Press.
- 中村明. 1977. 『比喩表現の理論と分類 (国立国語研究所報告 57)』秀英出版.
- 瀬戸賢一. 1995. 『メタファー思考』講談社現代新書.
- Sperber, D and, D, Wilson. 1986 / 95. *Relevance: communication and cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二他 (訳)『関連性理論—伝達と認知』1993 / 99. 研究社出版.)
- 武内道子. 2002. 「言語形式の明示性と表意」『英語青年』第 148 巻. 第 4 号. 240-41. (2002 年 7 月号. 36-37) .
- 武内道子. 2003. 「AND と BUT : 関連性理論の意味論と語用論」『神奈川大学言語研究』第 25 号. 59-96.
- Wilson, D. and D, Sperber. 1993. "Linguistic form and relevance." *Lingua* 90, 1-25.
- Winner, E. 1988. *The point of words: Children's understanding of metaphor and irony*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

座間直樹. 2003. 「アイロニー表現とエコー発話」 2002 年度神奈川大学修士論文.